産経新聞
平成２４年（2012年）１０月２７日　土曜日
H24.10.27

医者の嘘、患者の嘘

Dr. 和の町医者日記

「医者の本音」シリーズ⑦

失敗した時、正直に謝れるか

医療不信とか、医者不信という言葉をよく耳にします。あるいは医者にひどいことを言われて傷ついたとか、ドクターハラスメントという言葉さえも使われます。

最近、「患者目線の医療」とうたわれてはいますが、長い間、医療は上から目線だったことは否めません。専門家が、何も知らない病人に施してあげるといった感じでしょうか。それをパターナリズムといいます。

一方、インフォームド・コンセント（IC）という言葉は一般的になりました。説明と同意です。検査や手術や投薬をする際に、十分に説明してから患者さんの同意を得て行うことです。

しかし「まあ、ぜんぶ先生にまかせるわ。先生がええと思うようにして」と言われることがあります。一生懸命に説明してICを得ようとしても、「おまかせね」と言われると複雑な気分になります。「それだけ信頼してもらっているのか」と思う一方、「本当に私が決めちゃっていいの？」という気になります。

一方、善意で使った言葉が違う意味で取られることが時にあります。がんで闘病中の患者さんに「まだ3カ月は大丈夫よ」と励ましたつもりでも「あと3カ月しかない。医者に見捨てられた」と悲観的に取られる方もおられます。後で知って、がくぜんとします。言葉というものは受け取る人によってずいぶん違うものだ、と驚かされる毎日です。

医者も人間ですから失敗をします。失敗したことのない臨床医なんてこの世に絶対にいません。私自身も、寝るときに「きょうも多くの失敗をしたのではないか」と診察した患者さんの顔が出てくることがよくあります。

以前、大学病院で心臓病の患者さんと肺の病気の患者さんをそれぞれ間違って手術するという事故がありました。そんなばかな!? と思われるでしょうが、重大事故はたいてい単純な間違いによるのです。

そんな事故があって以来、医療の世界では「医療安全」という言葉が強く意識されるようになりました。そんな医療ミスは大学病院だから起こるミスでしょうか？　いや診療所でも起こっています。

正直に告白すれば、私自身もよく間違いをしています。これまでやってしまった大きな失敗のひとつとして、インターフェロンの注射を間違って違う患者さんに打ったことがあります。その患者さんの名前を呼んだときに、別の患者さんが聞き違えて入って来られたのです。

すぐに気がついて、患者さんに正直に謝りました。間違えた直後は、頭が真っ白になり、一瞬「訴訟」や「補償」という文字が頭に浮かびました。しかし、患者さんにはその場で許していただきました。幸い、その夜、微熱が出ただけで大事に至らず助かりました。

新葛飾病院の清水陽一先生（故人）は「うそをつかない医療」を提唱されました。これは実は患者さんにも言えると思います。薬を紛失したのに「犬が食べてしまった」などといわれると、こちらもどう対処していいか分からなくなります。また、内緒で同じ診療科目を二またかけて、同じ薬が重なったこともありました。うそをついていたのです。

医療は「信頼」を前提として成り立ちます。どちらかがうそをつくと、成り立たないどころか、トラブルの種になります。医者も患者もうそをつかないことが、医療において一番大切なことだと思います。まあ、言うは易く行うは難しですが。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成７年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。労働衛生コンサルタント。関西国際大学客員教授。54歳。ブログ（http：／／www.nagaoclinic.or.jp／doctorblog／nagao／）が好評。

インフォームド・コンセント（IC）　医療行為や臨床治験などに際し、起こり得る副作用までも含み、患者が納得するまで十分に説明を聞いたうえで、自由意思で同意をすること。その結果、治療を拒否することもICの概念に含まれる。